Gurdjieff Archival Document
Translation © Plavan N. Go, 2010

トルキスタンからアメリカまで

（グルジェフ『生は＜私が在る＞ときにのみリアルである』プロローグ抜粋）
「二つの目標」に関する前掲の引用のつづき

［一九〇四年、トランスコーカサスでの三度目の被弾で重傷を負った後、グルジェフはタクラマカン砂漠の西縁、ヤンギサールからそれほど離れていないところで身体を回復させ、このとき精神的な転機を迎える。以下はそれ以降の足取りについての記述である。］

多少なりとも健康を取り戻した私は、探求を再開したが、いまや目標は一つではなく二つになっていた。

その後の探求で自分が何をしたか、そして私が自分のなかに飼っている「頭が二つに分かれた好奇心の虫」をどんなふうに満足させたかについてはここでは書かない。これについては、この第三集の著作群を構成する本の一冊のなかで、もうじゅうぶんにたくさん書いているからだ。［注：第三集の現存する原稿にはこの記述はないが、第一集『ベルゼバブ』のなかに関連する記述が見つかる。］

さらに言っておくと、それから数年後、自分がそれまでに学んだことを人々の実生活に導入するには、「ヘルパーもしくはインストラクター」を養成するための学院をどこかに設立しなければならないと思うようになった。

この必要性が明らかになった後、私はありとあらゆる「比較的論考」の末に、そのような学院を設立する場所としてはロシアがもっとも適していると判断した。

一九一二年、私はこの目的を抱いて、ロシアの中心、モスクワへと向かい、そこに身を落ち着けるやいなや、「人間の調和的発展のための学院」という名のもとでそのような学院を設立することに向けての活動を始めた。肉体的にも精神的にもきついものである二年間の奮闘の結果、学院は急速にその形を整えていったが、そのとき突然、戦争が始まった。だれも長く続くとは思っていなかったその戦争は、やがて泥沼化し、「世界大戦」と呼ばれるに至った。苦しい年月が続き、そのあいだじゅう、私のこの不運な肉体はたえまない激務を強いられ、毎日毎日、私の肉体からは、私がそこに蓄えた量を数倍も上回る意志力と忍耐力が吸い出された。

不思議なことに、この人類全体の病から生じた諸条件にも私は慣れてきていたが、そのとき突然、とてもゆっくり、とても遠慮がちに、マダム・ロシア革命が舞台にあらわれた。

この貴婦人は、まだ足どりがふらふらしていたにもかかわらず、私のこの哀れな肉体にたいへんな打撃と影響を及ぼしたため、まもなく私の肉体は隅々に至るまで緊張し、一瞬の休息さえありえなくなった。

月日はゆっくりと過ぎていった。何世紀も過ぎたかに思えた。私は外側の世界ではもう息切れしかかっていたが、その一方で、私の内側の世界では、そこで永遠に対立しあう複数の要因の作用から生じる精神の力の高まりが頂点に達していた。

内的な精神の力が高まった状態にあって、私は後先を考えることなく、自分を行動へと駆り立てた。

ここでまたもや、私のこの肉体は、人体の物理的限界の点からして尋常なものではない一連の「芸当」を強いられることになった。

私はまた旅立つことにした。またもや通過不能と思えるようなところを抜けての旅であり、今度はコーカサスを越える必要があった。そして、そのような旅ではお決まりのこととして、飢えと寒さにたびたび苦しみ、そのうえこのときは、自分が後にしてきた混沌のなかに残された近親者、そして自分に同行する者たちの身の安全がつねに気になった。さらに悪いことに、赤痢の大流行が起きていた。そして私には、もう完治していると思っていた「ズァーバ」(狭心症)が再発した。

この旅を終え、荒れた状況のなかで数ヶ月を過ごした後、ふたたび旅立ち、国から国へと移り歩いた。そのあいだじゅう、さまざまなことに耐えなければならなかったうえ、当時ヨーロッパじゅうに蔓延していた「政治的狂気」の標的に自分がならないよう、あるいは「人生における甘美なるもの」をまだ知らぬうちに自分に同行する若者のひとりが餌食にされないよう、つねに「警戒」を怠らないことが不可欠だった。

とうとう旅を終えて、それから二年間、今度はフランスで学院を設立するため、精神的にも肉体的にもきつい仕事をたえまなく続けた。尋常なものではない私の長い人生のこの時期において、気まぐれで自分勝手な《運命》は、私に意地悪な罠を仕掛けてきた。二つのことが明白になった。つまり、私が旧ロシアに築き上げた分の物質的な財産はすべて永遠に消え失せてしまったことが明白になった。それとともに、もしも三ヶ月以内に「クール」な百万フランを用意できないなら、今度は私のほうが、やはり永遠に、煙突の煙になって消え失せずには済まないことも明白となった。

とくにそれに先立つ二年間の精力的な活動によって私のこの不運な肉体はぎりぎりのところまで疲れていたが、その内側では、この二つの「衝撃」のおかげで精神の活動がますます亢進し、頭蓋骨の内側には収まりきれないほどにまでなった。

どういう奇跡によるものか頭蓋骨は割れずにすみ、そこで私は、リスクを伴うアメリカ訪問[ムーヴメンツ公演旅行]を計画した。私同様に英語を片言も話せない連中をおおぜい連れての訪問であり、だれもが一文無しだった。

そして以上のすべてを締めくくる最後の和音として、アメリカからヨーロッパに戻ってきてから一ヵ月後、過去の人生での前述したような事故や病気の痕跡を残し、すでにめちゃくちゃになっていた私のこの肉体は、時速九十キロで走行する自動車もろとも、とても太い一本の木に激突した。